郡内研究

第 10 号

特集　城下町谷村を探る

芭蕉と谷村

安富一夫

天和二年（一六八二）十二月二十八日の江戸駒込大円寺を火元とする大火で、深川の芭蕉庵を焼かれた松尾芭蕉（当時三十九歳）が、甲斐国郡内の谷村城主秋元但馬守（芭蕉逗留時は摂津守）喬知の国家老である高山傅右衛門繁文（五百石取・俳名は麋塒、当時三十五歳）をたよって、麋時の別荘の桃林軒（現在の文化会館とふるさと会館の間で白木山の麓）に半年程滞在したということは定説になっていて、これを転機に芭蕉の俳風が変わってきたとも言われています。「芭蕉と谷村」とはどんな繋がりがあったのか、書簡や俳句で年代を追いながら解明してみましょう。

◎延宝八年（一六八〇）四月。

『桃青門弟独吟二十歌仙』が榑柾町の本屋太兵衛から刊行される。

これは、芭蕉が桃青と号していた頃、門弟たちが桃青門の存在を世に誇示したもので、杉風・螺舎（其角）・嵐蘭等に混じって、秋元家家臣の白豚（麋塒の実弟で、二代高山五兵衛の娘と結婚して三代高山五兵衛となる、麋塒より先に芭蕉の門弟になり、あだ名を六祖五平と呼ばれ、秋元家の江戸藩邸に勤めていて、当時二十二歳。のち谷村に帰藩する）の名前も見え、嵐蘭は三十六句目の挙句に「桃青の園には一流深し」と自賛する程の高弟たちの集まりでした。

◎延宝九年（一六八一）五月十五日付。

『高山傅右衛門（麋塒）宛書簡』

五月十五日　　松尾桃青（書判）

貴墨　忝　致拝見、先以御為被成御坐珍重奉存候。私無異義罷有候。仍而御巻致拝吟候。尤感心不少候へ共、古風之いきやう多御坐候而一句之風流おくれ候様に覚申候。其段近比御尤、先は久々爰元俳諧を も御聞不被成、其上京大阪江戸共に俳諧殊之外古ク成候而、皆同じ事のみに成候折ふし、所々思入替候ヲ、宗匠たる者もいまだ三四年前已前の俳諧になづみ、大かた

は古めきたるように御坐候へば、学者　猶俳諧にまよひ、爰元にても多クは風情あしき作者共見え申候。然る所に遠方御へだて候而此段御のみこみ無御坐、御尤至極奉存候。玉句之内三四句も加筆仕候。句作のいきやう、あらまし如此に御坐候。

一、一句、前句に全躰はまる事、古風・中興共可申哉。
一、俗語の遣やう風流なくて、又古風にまぎれ候事。
一、一句細工に仕立候事不用候事。
一、古人の名ヲ取出て「何々のしら雲」などゝ云捨る事、第一古風にて候事。
一、文字あまり、三四字、五七字あまり候而も、句のひびき能候へばよろしく、一字にても口にたまり候ヲ御吟味可有事。

子供等も自然の哀催すに
つばなと暮れて覆盆子苅原　　才丸
賤女とかかる蓬生の恋
よごし摘あかざが園にかいま見て　同
今や都は鰒を喰らん
夕端月蕪ははごしに成りにけり　其角
といはれし所杉郭公
心野を心に分る幾ちまた　同
山里いやよのがるゝとても町庵
鯛売声に酒の詩を賦ス　愚句
葛西の院の住捨し跡
ずいきの戸蕗壺の間は霜をのみ　同

この書簡は、谷村にいた麋塒が、江戸の芭蕉に作品を送り、意見を求めたのに対する返書で、現存する芭蕉の一番古い手紙だと思われます。

要約すれば、あいさつの文面につづいて、貴方の句を読まして頂きましたが、良いと思われる句も有りますが、大体が時流に遅れて古過ぎます。久しく江戸の句会にもお出でにならないので無理からぬ事と思います。京・大阪・江戸でも指導する人も学ぶ人も古臭い句をつくっている人もまだ多いし、遠く離れて甲斐の山の中に隔てていればなおさらの事と思います。貴方の句も二三句添削しておきました。連句は次のような五つのことに気を留めてください。なお後記の才丸と其角と私の句で、付けと転じの呼吸をおくみとりください。

◎天和二年春（一六八二）

麋塒が江戸に出府。京の望月千春も東下。その興行に拠る『十二吟百韻』（武蔵曲）

「錦どる」

一　錦どる都にうらん百つつじ　麋塒
二　壱花ざくら二番山吹　千春

発句と脇句だけで、第三から挙句までは略す。

一は、古今集巻一にある素性法師が、花ざかりに京を見やりてよめる「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」をふまえた、京都の人、千春に対する挨拶句で、朱雀大路に植えられている中国渡来の枝垂柳に混じった桜もきれいでしょうが、江戸で今流行っている種々のつつじも良いものです、是非、京の都にも植えてください。

二は、富士の裾野の山桜もきれいでしょうが、勝山城の裏手にある「おさん沢」の山桜の黄色もきっと鮮やかなことでしょう、と挨拶を返しています。麋塒が話した郡内の花のことが下敷きにされているのだと思います。

『錦どる』には、麋塒　十一・芭蕉　十一・千春　十　其角　十一のほか、国中の教来石村（現・白州町）の山口素堂も同座して十句を読んでいます。

◎天和二年春（一六八二）　同じ頃。江戸にて、『世吉』

「田螺とられて」

一　田螺とられて蝸牛の益なきやうらやむ　暁雲
二　泥鰌始メて泥に尾を曳　桃青
三　岸に折ころころ柳みどりにし　麋塒

以下四十四句までは略す。

一は、田螺は食べられるので捕られてしまうが、蝸牛は紫陽花の葉に遊んでいても、人には無用なので安心であると、暁雲は我が身を蝸牛に例えたのでしょう。

二は、中国の唐の時代の荘子（荘周の敬称）が表した書物のなかの、自身を泥の中に尾をひく亀に例え、仕官しない身の心安さを望んだ言葉を、さらに泥鰌にかえて表現したものと思われます。芭蕉は生涯荘子の思想に傾倒していました。

三は、川岸の猫柳もようやく芽吹いてきましたよ、と言うような意味。これは七吟で暁雲・桃青・麋塒ほか計七人が同座しています。

◎天和二年春（一六八二）　同じ頃、江戸にて『歌仙』

「白魚露命」

一　月と泣く生雪魚の朧闇　其角
二　蓑にたまらぬ蝦醤の淡雪　桃青
三　孤村苔の若木の岩長て　麋塒

以下三十六句まで略す。

一は、月も泣きそうな薄明りの夜、水に降った雪のように白魚の命は短いものです。

二は、蝦醤は、普通醤蝦と逆に書く、蝦に似た一センチぐらいの小形の甲殻類の総称。小さすぎて蓑に積もることもできない淡雪の哀れさと、脇をつけています。

三は、寂しい離れた村の岩のうえに若木が伸びている風景。これは八人で歌仙を巻いています。

◎天和三年夏の始め（一六八三）　麋塒の離れの「桃林軒」にて『歌仙』

『胡艸』

一　胡艸垣穂に木瓜もむ屋かな　麋塒
二　笠おもしろや卯の実むらさめ　一昌
三　ちるほたる沓にさくらを払ふらん　芭蕉

以下は略す。三人で三十六句。

天和の大火では、芭蕉庵も秋元家の江戸藩邸も類焼したので、先に谷村に帰っていた麋塒が、一昌を同道してきた芭蕉を迎えて、歌仙を巻いたものと思われます。

一は、胡艸とは、葉を香料する胡菜のことか、自身を俳諧の下手（へぼ）に例えたのかもしれません。折角江戸からお呼びしても、ここには何もご馳走する物がありません、お疲れが取れるように蓼の辛味を利かした胡瓜揉でも召上がってください、との意。

二は、山路を通って卯木にふれると、実が村雨のように笠に当たるのも風情がありますよ、との意。

三は、ぱらぱらと当たる卯木の実の句を受けて、蛍が飛び散ったり、落花が沓にかかるさまに見立てたもの。

◎天和三年、前記と同じ頃、麋塒の離れの「桃林軒」にて『歌仙』

『夏馬の遅行』

一　夏馬の遅行我を絵に見る心かな　芭蕉
二　変手ぬるゝ滝凋む滝　麋塒
三　蕗の葉に酒灑竹の宿黴びて　一昌

以下は略す。三人で三十六句。

一は、夏の暑い日は馬の歩みも捗らない、これは自分の俳

句に対する思いと同じようなものだ、と言う意味にもとれるが、麋塒の所に来るのが遅くなった心を読んだ句。

この句は、数回にわたる推敲を重ねて

甲斐の郡内といふ処に到る途中の苦吟（『一葉集』発句の部）

「馬ぼくぼく我を絵に見る夏野哉」に定まっています。

二は、水量が少ないので、代わる代わる体を濡らしている景色。

三は、滝の水の句を受けて、蕗の葉を酒杯の代わりにする、竹林の七賢人の宿も人気がないよ、というような句意でしょう。

◎天和三年（一六八三）谷村に流寓中の芭蕉の句。

田原の滝にて

勢ヒあり氷消えては滝津魚（続虚栗）

宝池山正蓮寺にて（旧・戸沢村）

名月の夜やさぞかしの宝池山（正蓮寺に伝わる伝説）

秋元家菩提寺である泰安寺の乞により染筆

松風の落葉か水の音すずし

（蝶夢編類題別「芭蕉発句集」）

江鮭ありもやすらん富士の湖（存疑の句）

芭蕉は、半年も谷村に仮寓していたのだから、時折は吟行などもしていたのではないでしょうか、埋もれている句の発見が望まれます。

◎天和三年五月頃、芭蕉は江戸へ戻る。

其角編『虚栗』のために跋文を書く。十七歳で蕉門に入った其角は、この時二十三歳。跋文は省略しますが、天和三年癸亥年仲夏日・芭蕉洞桃青鼓舞書と大変な自信と抱負をもって書かれています。これは芭蕉が桃林軒に居るときに其角から頼まれて想を練ったものと思われます。

◎天和三年秋九月。山口素堂が芭蕉庵再建の寄付を募る。五十三人のなかに、『一、五匁五兵衛』とあるのは白豚のことでしょう。

◎天和三年冬。

ふたたび芭蕉庵を造り営みて

霰聞くやこの身はもとの古柏　芭蕉

と、吟じています。谷村へ流寓しているときは槨塒の厚遇に甘えてもいたが、また板葺き屋根の下で霰を聴きながら一枚の布団にくるまって柏餅のように寝よう、という意。

◎貞享二年（一六八五）「野ざらし紀行」または「甲子吟行」ともいう。

芭蕉が故郷伊賀上野への行脚の帰途谷村に立ち寄って

甲斐山中

山賤のおとがい閉るむぐらかな（続虚栗）

山賤とは、樵とか炭焼きなどで生計を立てている人、おとがいは下顎のこと、むぐらとは、カナムグラなど蔓性の繁殖力の強い草のことで、芭蕉は延宝九年（一六八一）に起きた越訴のことでも聞いたのか。何を聞かれても黙っている山賤に、箝口令にがんじがらめにされている百姓たちのことを感じとったのかも知れません。

甲斐の山中に立よりて

行駒の麦に慰むやどり哉（野ざらし紀行）

山中は山の中と解すべきでしょうか、馬は普通は麦畑の中を歩いても、麦を食べないように躾られています。百姓屋で大麦の煮たものを飼葉にまぜてご馳走になったのかも知れません。

◎元禄三年（一六九〇）　北枝宛の芭蕉書簡

池魚の災　承、我も甲斐の山ざとにひきうつり、さま〳〵苦労いたし候へば、御難義の程察申。……以下略

四月廿四日　ばせを

北枝丈

これは、元禄三年三月十六日の金沢の大火で家を焼かれた北枝が、愛していた桜も炭になってしまったが、すっかり散った後なので「焼けにけりされども花は散りすまし」と吟じたことを賞賛した手紙の冒頭の部分で、ここでも、谷村に仮寓したことがでています。

◎元禄五年（一六九二）　許六宛の芭蕉書簡

許六雅丈　芭蕉

御手翰再三　辱。先日御入来之處、いずれも〳〵留

主ニて御残多奉存候。甲州旅立之事、寒気甚舗御座候間、春ニ成候而、可然由、人々も申、甲斐の国便りニも、雪など漸〻重り、凍風肌を稜など申来候而、冬道之程、一夜の草枕もくるしかるべき旨、申越候故、憶病神に驚され候而、とく〳〵春に相定候。……以下略

霜月十三日

この文面で、芭蕉が四十九歳の時、谷村に行きたいと連絡をとったのに、槨塒か白豚から、雪も積もり空風も肌を刺す（寒風稜々と言います）ので、冬の道中はお止めになって、暖かくなってからお出かけください。と申し送ったことが分かります。許六は芭蕉の弟子でもあり、絵は芭蕉の先生でした。

◎元禄七年（一六九四）十月十二日申の刻（午後四時頃）

芭蕉は、大阪は久太郎町南御堂前、花屋仁左衛門の裏屋敷で永眠。

芭蕉の最終吟は、十月九日、支考に対し「大井川浪に塵なし夏の月」が園女亭で作った白菊の句とまぎらわしいと、この句を廃し次のように直させたものです。

清滝や波に散り込む青松葉　翁

この句は、谷村の泰安寺での乞いによる『松風の落葉か水の音すずし　はせを』と、良く似ています。命終わる我が身を青松葉に例えたとき、谷村でのことが脳裏をよぎったのではないでしょうか。なお、この二つの句は、芭蕉研究の第一人者だといわれる、五升庵蝶夢の「芭蕉翁発句集」安永五年（一七七六）には並べて書かれています。（写真参照）

◎元禄八年（一六九五）六月朔日付　槨塒宛杉風書簡

芭蕉の遺語として、九ヵ条にわたり俳諧のありようを傳へる中で、最後の条に……

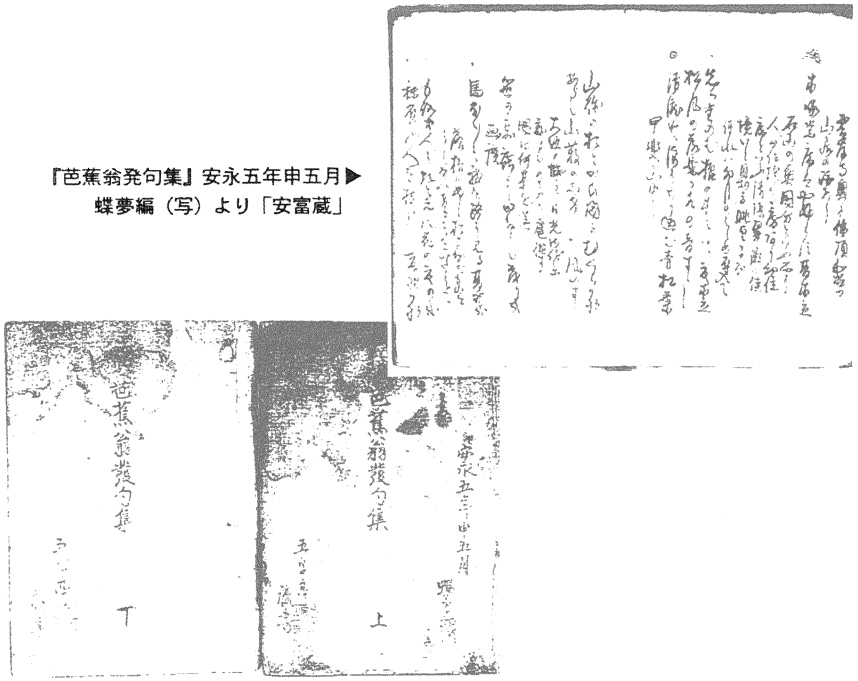
『かねがね其許へ参り申すべき由、申され候へども、彼是いたし、参り申さず候へば、亥（元禄八年）の春は罷り下り、秋中其許へ参り申すべき由申し置き候うところに、皆夢現となり行き申し候。この度玉句俳吟仕り候へば、涙流し申し候。以上

六月朔日　杉風

槨塒様

尚〻白豚丈へも此段御傳へ可被下候。

これは芭蕉没後の手紙ですが、芭蕉は春から秋まで谷村



『芭蕉翁発句集』安永五年申五月▶
蝶夢編（写）より「安富蔵」

に逗留したいと言っていたことが分かります。また麋塒は、芭蕉の死を悼む句を杉風宛てに送ったと思われる文面です。なおがきでは、白豚も芭蕉門の人達との親交が続いていたことが明らかです。

◎余話

○天和の大火のこと

この火事を「振袖火事」と言ったり「八百屋お七」の火事と言ったりするが、いずれも誤りです。「振袖火事」とは、明暦三年（一六五七）一月、本郷丸山町の本妙寺で、病死した三人の娘の因縁深い振袖を焼いたところ、本堂に燃え移り、十万人以上の死者を出し、江戸城本丸も焼失したという火事。「八百屋お七」の火事は、天和二年の火事で駒込の吉祥寺に避難したお七が、寺小姓の吉三郎に恋慕して火を付けたという天和三年の火事のことで、西鶴の「好色五人女」の第四話では小火のように書かれています。

芭蕉庵が焼失した天和二年の火事は、大名家七十五家・神社四十七社・寺院四十八字が焼け、焼死者実数は千人余と記録されています。

○麋塒の俳号

最初の俳号は「柳梢」で、秋元の江戸藩邸が柳原にあったからかもしれません。「麋塒」の麋はおおきな麋、塒はねぐらの意味。この頃は郡内にも大きな鹿がいたことと思われます。（昭和四十年代に立派な角をもった大きな鹿が、東京電力の駒橋発電所の水槽に流れついた事があり、先輩がこれは「なれしか」だと言いました）麋塒は晩年「幻世」と号しました。

○六祖五平（白豚）

六祖五平のことを、「彼のもの一字だにしらず」「目に一丁字はなかった」と言う説もあるが解釈の誤りです。「六祖」とは、中国禅を確立した「六祖・慧能」のことで、慧能は広東省の貧農の生まれ、文字もろくに使えない米つき小僧だったとき、仏教学者の印宗の弟子たちが、「風が動くのか、幡が動くのか」と言い争っていたときに「見ているあなた方の心が動くのだ」と言い、この言葉に感服した印宗が、慧能の弟子となったという「風幡問答」の故事の中の、仏教についての学歴が無かったことだけを引き合いに出したものです。白豚は禅の道に優れていて、佛頂和尚から六祖と言う渾名をつけられました。

○佛頂和尚

芭蕉・麋塒・白豚たちの参禅の師。俳句は芭蕉についたのでしょう「九億劫以前もおなじ今日の春」などの句があり、秋元喬知が寺社奉行の時に、根本寺寺領の紛争で勝訴しています。

○杉山杉風

日本橋で魚問屋を営み鯉屋と号しました。芭蕉の弟子でもあり後援者で、深川芭蕉庵は鯉屋の生簀の番小屋です。初狩村（現・大月市）には杉風の姉が嫁した磯部家があり、谷村流寓中の芭蕉が訪れたという説もあります。鯉屋の手代だった芭蕉の甥を麋塒が世話をして士分に取立てた話もあります。

○桃林軒のこと

芭蕉が谷村に流寓する前は、もっぱら「桃青」の俳

号を使っていたので、麋塒の離れも芭蕉が仮寓してから「桃林軒」と言うようになったのかもしれません。

後書き

紙面の都合で、冒頭の麋塒宛て芭蕉書簡以外は要点のみにしました。この稿を書くにあたっては、大勢の先学や、ことに俳友でもある小林貞夫（佐多夫）氏の私家本『芭蕉の谷村流寓と高山麋塒』に依ることが多かったことを付記し、感謝いたします。

（都留市四日市場三二三の一）